



TITLE:

家庭二關スル新統計調査例

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 家庭二關スル新統計調査例. 經濟論叢 1916, 2(2): 293-299

ISSUE DATE:

1916-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/126955>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

第二卷 第二號

論說

●戸數割及戸別割ヲ論ズ

法學博士 神戸 正雄

●戰後ノ米國ニ於ケル歐洲移民運動ト日本移民問題(二)

講師 米田 庄太郎

●民族的自覺ト植民地土民ノ教育

助教授 山本 美越乃

研究

●不換紙幣ノ價格ニ就テ

法學博士 戸田 海市

●大藏省證券ノ割引歩合ニ就テ

法學士 三木 純吉

●保險學說ノ發展(二、完)

法學士 小島 昌太郎

雜錄

●中田公直氏遺著「佐藤信淵ノ農政學說」

同志社大學教授 瀧 本 誠 一

●米ノ生産費ニ就テ

助教授 河 田 嗣 郎

●商業道德ト時勢ノ變

法學博士 神 戶 正 雄

●家庭ニ關スル新統計調査例

教授 財 部 靜 治

●中歐經濟同盟說ニ就テ

法學博士 小 川 郷 太 郎

●幼兒死亡ト貧困

法學博士 河 上 肇

●米國ニ於ケル各國移民ノ消長

助教授 山 本 美 越 乃

●小國ノ將來

講 師 高 田 保 馬

●紹介——祖國ヲ顧ミテ(河上博士著)孤立國(谷井法學士譯)蘇峰文選(德富猪

一郎著)

家庭ニ關スル新統計調査例

教授 財部 靜治

本邦社會統計改善ノ一面ハ之カ統計調査ノ方法從ヒテ又官廳統計事務ノ改善ニアリトハ吾人ノ常ニ懷抱セル見解ナリ先進國ト俗ヲ異ニスルコト多ク又統計調査ノ基本必スシモ同シカラサル我邦ニ於テ右ノ目的上彼ノ方法ヲ其儘盲奉模擬スルハ必スシモ可ナラスト雖モ其調査上ノ諸新例ハ適切ナル方法改良ヲ思案スルノ手引又ハ之カ評論ノ參考材料トシテ甚タ有益ナリ以下探錄セル二小短編ノ如キ此趣旨ヲ達セントシテ得タル結果ノ一端ニ外ナラス。

一、結婚者ノ住居需用

人口統計調査ノ結果ハ經濟的諸企業ノ條件又ハ補充トシテ大ニ實用アルヘシトハ先ツ推測ス

ヘキコトナルモ實際上カク利用セラルル程度ハ尠キヲ常トス而モ亦人口統計調査ニヨリ經濟上ノ振興ヲ促スハ極メテ重要ナルコトモ珍シカラス結婚者ノ住居需用ヲ査定スルカ如キハ恰モ之カ一例ニ供スヘシカ、ル調査ヲ遂ケタル諸都市ノ一トシテ獨逸ノはるれヲ舉ゲ得ヘシ乃チ同市ニテハ身分登記吏員ニヨリ記入サルヘキ結婚者調査用紙中補足尋問事項トシテ(一)結婚前ノ住居地及特有住居(二)結婚後ノ共同住居ニ關スル問ヲ加フルコトセリ而シテ是等調査材料中一九一一年乃至一三年ノ分ヲ整理セル結果ハ一九一三年分同市統計年表中附錄トシテ發表セラレシ由ナルカ之ニ關聯シテ Deutsches Statistisches Jahrbuch, 6. Nr. 10ノ報スル所次ノ如シ。

結婚ハ所帶新設ノ緣由トナルコト多シ而モ亦住居需用ノ多寡ハ新規所帶及引越シ來レル所帶ノ數ニヨリ決セラル而シテ引越シ來レル所帶ノ數ハ主トシテ警察ノ目的ヨリスル住民届出役場 Einwohnermeldeamtノ調査書類ニヨリテ窺知シ得ヘキモ新設所帶ノ數ハ結婚ノ數ニヨリ査定ス

ルノ外ナシサレト又婚姻ヲ結ヘル人々中一部ノ徒ハ移住其他ノ理由ニヨリ其市内ニ新居ヲトスルノ問題ト沒交渉ナリカクテはるれノ調査ニアリテハ斯婚者ニヨル住居需用ノ程度ヲ測ルノ尺度トシテ單純ナル結婚數以外ノモノヲ求メタリ蓋シ住居ニ關スル市況ヲ知ラントセハ右特殊需用ノ程度ヲ問フノ外ナク市内ニ於ケル結婚總數ヲ問フヘキニ非レハナリ。

身分登記所ノ記錄ニヨリ窺知セラルル結婚數ハ住居需用ヲ知ラントシテ問フヘキ夫婦ノ總數ニ合致セス蓋シ結婚ノ身分登記後間モナク起レル來往移住ハ其間ニ移動ヲ生セシムヘキヲ以テナリ然ルニ一都市ヨリ外ニ移住スヘキ新婚夫婦組數ハ算定シ得ヘキモ其都市ニ移リ來レル者ノ數ハ新婚夫婦ノ數トシテ知ラレスシテ新來所帶主ノ數トシテ示サルルノミナリ且又はるれノ特別事情ヨリセハ結婚數ヲ住居需用決定ノ實用ニ供スルノ目的上之ニ制限ヲ加フヘキ他ノ事由アリ乃チ新婚夫婦カ殘ラス新住居ヲ欲求スルコトナキハ著明ノ事實ナリ或ハ両親ノ所帶内又ハ夫

婦ノ一方ノ所帶内ニ入りテ共棲シ或ハ所帶ヲ起スノ意志又ハ資力ナキタメ結婚ニ次クニ新所帶ノ構ヘヲ以テスルコトナキノ一事ヲ見テ知ルヘシカクテはるれノ調査ニアリテハ諸推定ヲ下セル中ニモ特ニ結婚前ニ當該男又ハ女ニヨリ特ニ構ヘラレタル住居ノ數ヲ結婚後同市ニ殘存セル結婚者ノ住居數ヨリ差引クコトニヨリ所要ノ調査ニツキ有用ノ根據ヲ收メ得ヘシトセルモ別ニ又同市住民氏名宿所錄ヲ引照シ特有住居ヲ占ムル人員トシテ之ニヨリ示サルル所身分登記所ニヨリ示サルル數ニ比シ尠キノ事實ニ鑑ミ右計算ノ結果ヲ少シク加増スルノ要アリトセリ。

更ニ猶結婚者ノ住居ニ對スル欲求ノ大サ及種類ヲ知ルハ住居ニ關スル市況ヲ明カニスルタメ特ニ重要ナルヘシカクテ結婚者ノ職業并ニ其職業上ノ地位ヲ問フコトトセンカ必要ヲ告クヘキ住居ノ大サ及種類ヲ幾分カ窺知シ得ヘキモはるれノ調査ニヨリテハ右結婚者ノ求ムル住居ノ大サニ關スル報告ヲ含マス之ト共ニ所帶ノ入來ニヨル住居需用并ニ所帶ノ退去ニヨル住居供給ニ

付同種ノ査定ヲ遂ケ得タリトセンカ是等ノ數ハ實際上有用ナルヘシ。

はるれニ於ケル調査ノ結果諸設間中信賴スヘキ答申ヲ收メシ程度ニ於テ同市結婚者ノ住居需用ノ多寡ヲ知り得タル所ニヨルニ結婚總數百中約四五ハ同市ノ住居需用ニ沒交渉タルヲ示セリ從ヒテ結婚者中尠カラサル分子ハ事實上其結婚ノタメ其都市住居需用増進上既ニ又ハ全ク無關係タルヘキヲ見ルヘシ要スルニ建築業者ハ結婚總數ヲ以テ造家ノ目算ヲ立ツルノ絕對典據トシテ利用スヘキニアラス家主ハ結婚總數ヲ以テ空家ノ新借ヲ期スルノ事由ニ供スヘキニアラス。

二、佛國一九〇六年ノ親族統計

佛國民ノ蕃殖力少キハ數十年來同國經世家ヲシテ憂ヘシメ之カ原因ニ關スル幾多ノ研究ヲ生ミ又其重大原因カ縱ニ子數ヲ制限セントスル親族團長ノ意志ニ存スルハ普ネク人ノ知ル所ナリ而シテカク小親族團ノ保持ヲ目的トスル合理主義的意見ノ諸影響ヲ解析シ其結果ヲ計數的ニ認識シ又之カ對策ヲ工夫セント欲セハ詳密多岐ナ

ル親族統計ヲ遂クルヲ要ス現ニ同國カ夙ニ三〇年來列國ト其趣ヲ異ニシ此方面ニ關スル特殊統計調査ヲ遂クルハ此必要ニ促サレシモノナリ而モ亦每五年一回ノ人口實查中一八八六年來一九〇一年ニ至ル迄四回ノ調査ニ附帶シテ調査セル所ニテハ實查ノ日ニ各親族團ニ付殘存スル子數ヲ問フコトトセリ夫レ普通ノ所帶調査ニアリテモ自ラ所帶員ノ親族關係ヲ問フヘシト雖モ現今普通ノ人口實查ニ見ルカ如ク現在人口實查ノ主義ヲ奉スルトキハ自ラ子ノ内現ニ親ト共棲セル者ノミヲ問フコトトナリ其而親ヨリ生レタル子又ハ殘存セル子ノ總數ヲ問ハス從ヒテ蕃殖力研究ノ旨ヲ貫キ兼スルノ事情ニ鑑ミ佛國ハ夙ニ右ノ特例ヲ開ケルモノナルモ蕃殖力調査トシテハ等シク完キヲ得ス之ニヨリ嫡出蕃殖力ノ作用ヲモ窺ヒ得ヘキモ其力ノ程度ヲ窺ハシメサリキ蓋シ現在ト不在トヲ問ハス生存セル嫡出子ノ數ヲ問フノミナリシニヨリ既ニ死セル子ト特ニ現在ノ若夫婦ヨリ將來生ルヘク豫期セラルル子ヲ不問ニ付スレハナリ、然ルニ一九〇六年ノ調査ニ

アリテハ此點ニ付一進境ヲ開キ一親族團ニ生レタル子ノ總數ヲ問フト共ニ就中殘存セル子數并ニ調査前ニ死シタル子數ヲ問フコトトセリ之カタメニ親族團又ハ夫婦ノ蕃殖力ヲ緩密ニ査定スルノ目的ニ一層近ツキ又後裔ノ死亡狀況又ハ生存力ヲ一層詳察シ得ルコトナレリ、其外同年ノ調査ニアリテハ尋問事項ノ増加并ニ材料整理ノ加密ニヨリ親族統計上重要ナル新認識材料ヲ授クルコトナレリ時ニ出生減退ノ事實及原因研究上重視スヘキ材料乃チ(一)親族團ノ職業及社會的地位別(二)親族團長ノ婚姻持續期間別并ニ其年齡別等ヲ授クルコトナリ(是等調査材料ノ詳細整理ハ各縣 Département 別ニ遂ケラレシモ全國ニ關スル結果ノミ細大洩ラサズ公表セルモノナシ Statistique des Familles en 1906. Paris 1912 トストイフ) 別ニ又職業ト蕃殖力トノ關係ニ關スル調査補充ノ目的上同國中央統計局ノ諮問機關 Conseil Supérieur de Statistique ノ議ニ基ツキ一九〇七年一部ノ使用人及勞働者ノ家庭ニ就キ特別委員調査ヲ遂ケ其結果ヲ一般親族統計ニ付シテ發表セリ夫レ家庭ニ關スル諸

統計ハ諸開明國ニ於テ今日尙割合ニ等閑ニ付セラルル所吾人ハ今右新調査ノ方法ニ對スル小評并ニ其結果ノ要領ヲ紹介セント欲スルモ(後ノ點ニツキ Mayr und Zahn, Allgemeines Statistisches Archiv, VII. Bd. I 所報ヲ抄録ス)茲ニ先ツ佛國カ右一九〇六年ノ調査(并ニ之ヲ繰返セル一九一一年ノ調査)上親族統計ノ實際的改善ニ盡セルハ注目スヘク又此改善ノ功績ハ之ヲ同國官廳統計ノ長官 Lucien March ニ歸スヘキコトヲ附言シオカント欲ス。

一九〇六年ノ親族統計ニアリテハ從來ニ反シ生レタル子ノ總數ヲ問フノ新例ヲ開キシヨリ初メテ普通ニ所謂「子ナシ夫婦」組數ヲ一層詳密ニ示シ得ル事トナレリ素ヨリ嚴密ニ論スルトキハ右ノ調査モ將來生ルヘク豫期セラルル子ヲ問ハサルヲ以テ其結果ニヨリ子ノ有無ニ關スル絶對ノ判斷ヲ下シ兼ヌヘク單ニ從來尙子ヲ生メルコトナキ夫婦組數ヲ判定セシムルニ過キスト雖モ從來ノ調査上子ヲ生ミ乍ラ現在最早生存セル子一人ヲモ有セサルヲ同シク子ナシ夫婦中ニ數フルノ弊ヲ矯メタル點ハ一進歩ナリ、同年三月

四日現存セル有配偶男(從ヒテ離婚セル男并ニ寡寡ヲ含マス)八、〇八九、九六〇中子ノ有無多少并ニ其婚姻持續期間ニヨル類別調査ノ結果ニヨルニ其約八分ノ一(絕對數ニヨレハ九三六、三九八)ハ子ナシナリ又其結果ヲ百分比トシテ示セル表

婚姻持續期間	親族團百中		計
	子ナキモノ	子アリモノ	
〇—四年	一—四子	五子以上	100
五—十四年	三〇・四	六〇・二	100
一五—二十四年	一〇・〇	九・七	100
二五—三四年	八・三	二・五	100
三五年以上	六・四	三・〇	100
通算	二・四	一・八	100

ニヨリ察スルニ子ナキモノノ割合ハ婚姻持續期間二五年以上ナル男ニアリテモ尙六%以上ナリ
一親族團ノ蕃殖力ハ第一ニ其團長ノ年齢及婚姻持續期間(其男再婚以上ナルノ例ヲ想像シ得ヘシ從ヒテ此期間ハ直チニ一夫婦組ノ持續期間ヲ意味スルヤ否ヤニツキテハ疑問ノ餘地アリ)ニヨリ左右セラル。一般ニ兩元素高マルニ從ヒテ其力多キヲ見ル先ツ年齡別ニツキ察スルニ六〇乃至六五歳級ノ親族團長ハ通シテ最多數ノ子(三・五四人)ヲ有スルヲ見ル又生レシ子ノ總數(同調査ニアリテハ現存セル夫婦組數ヲ有配

偶男數ニヨリ測リ得ヘキモノトシ其親族トシテ生レタル子ノ總數ヲ示スニ production brute ノ語ヲ用井之ニ對シ各親族團ニツキ現ニ殘存セル子ヲ間ヒテ得タル計數ヲ production nette トシ前數同調査ノ結果ト比較スルノ便ヲ開ケリ)ヲ婚姻持續期間別トシテ示セル所左ノ如シ

婚姻持續期間	一親族團平均子數	婚姻持續期間	一親族團平均子數
〇—四年	〇・九一	二五—三四年	三・七四
五—十四年	二・三〇	不詳	二・六九
一五—二十四年	三・二九	通算	二・七九

更ニ右婚姻持續期間別ニ年齡別ヲ組合セタル結果ニヨルニ二五年以上持續セル有配偶男中四五乃至五〇歳ナル者最大ノ子福者(一親族團平均四人)ナリコハ取リモ直サス若クシテ結縁サレ又其持續ノ年間モ永キ夫婦ニ關スレハナリ

両親ノ年齢及婚姻持續期間トナリテ顯ハルルガ如キ自然の事由ノ嫡出蕃殖力ニ及ボス影響ハ經濟的及社會の事由ニヨリ重大ノ變化ヲ受ク否寧ロ右兩作用ニヨル影響ノ間甲乙ヲ付シ兼スルノ狀ナシトセス一九〇六年ノ佛國親族統計ハ親族團長ノ職業及社會の地位ニヨリ親族ヲ類別シ又是等ノ材料ヲ年齢及婚姻持續期間別ト組合セ

社會各階級ノ蕃殖力ヲ窺ハシムヘキ有用材料ヲ授ケタリ今其梗概ヲ伺フニ親族團長ノ年齡別上最多數ノ子ヲ示セルハ六〇乃至六五歲級ノ一親族團平均子數三・五四人ニ存スルヤ前述ノ如クナルカ之ヲ職業別社會階級別トシテ察スルニ其間相應ニ大動搖アリ乃チ各別ニ六〇乃至六五歲級ノ者ニツキ察スルニ左ノ如シ

利子衣食者及無業者	親族團百ニ付子數		獨立營業者	親族團百ニ付子數	
	二九四	二九八		三五八	三九五
公設物寄寓者	二八五	二九八	使用人	二九八	三九五
陸海軍人	三一四	二九八	勞働者	三九五	三九五
漁夫及海員	四八一	二九八			

職業別及社會階級別トセル子數上ノ順位ハ他ノ年齡級ニ於テモ大體右ニ示セル所ト同シク唯之ト完全ニ一致ストナシ兼ヌルノミ。

婚姻持續期間ニツキテハ社會上ノ三大別トシテ察セル結果次ノ如シ

社會上ノ地位	親族團百ニ付子數		婚姻持續期間別親族團百ニ付子數	不詳
	算年	年		
獨立營業者	三九三	三九三	四年	二五五
使用人	二九八	二九八	五年	二五五
勞働者	二九八	二九八	六年	二五五
			七年	二五五
			八年	二五五
			九年	二五五
			十年	二五五
			以上	二五五

婚姻持續期間ヲ不問ニ付シ一般觀察ニヨル際上表第二列ノ示スカ如ク獨立營業者ノ子數勞働者ノ子數ニ比シテ多キモソハ前者ニ高齡者多キノ結果ニ外ナラズ之ヲ年齡級及婚姻持續期間別トシテ察スル場合其何レニアリテモ子數ノ多寡上勞働者ノ親族團ハ第一位ニアリ獨立營業者之ニ次ギ使用人末位ヲ占ム。

其外又佛國ノ調査ガ職業仔細別研究上示セル結果中興味アルモノ甚ダ多シ或ハ一定數ノ子ヲ産シ子々孫々世代相承クルノ期間ハ農業者ハ工業者ニ比シテ短ク從ヒテ夫等ノ子産出ノ後子産ヲ止ムルコトモ亦農業者早キヲ示セルノ觀アルガ如キ或ハ獨立營業者中大工業家ハ小工業家ニ比シテ子福者タルヲ示セルガ如キ或ハ肉類商ニ付其業主ニツキテ見ルモ又其使用人ニツキテ見ルモ子實多キノ事實ヲ示セルガ如キハ其一端ナリ尙勞働者ノ家庭ニ付職業細別子數ヲ調査シテLucien March 自ラ其結果ヲ括約シ仕事ノ機會ニ富ミ又割合ニ規則正シク之ヲ發見シ得ベク又其勞酬モ割合ニ安定ナル諸大產業勞働者ハ其嫡

出蕃殖力ニモ亦割合ニ富ミ小手工業者洽ネク存在スル所特ニ都市并ニ其仕事ニ腕力ヲ要スルコト尠キ諸業勞働者ニアリテハ蕃殖力之ニ劣リ又勞働者ガ使用人ノ階級ニ接近スル程度ニ應ジテ此點モ亦遞減シ特ニ職業及住居ノ都合上子ナク或ハ子アルモ少キ所帶ヲ可トスベキ所蕃殖力モ極メテ少シトセルハ味フ可シ

前記特別委員調査ノ結果中特ニ擧グベキハ親族團ノ所得別調査ナリ計票約三十萬就中婚姻持續期間一五年以上ナル夫婦ヲ本トシ査定シ得タル所ニヨルニ勞働者ニアリテハ子數ハ所得多キニ從ヒテ遞減スルノ狀アリ（此逆行關係ハ子ナシ夫婦ノ研究ニヨリテモ亦等シク示サレタリ）使用人ニアリテハ二五百乃至一萬弗ヲ儲クル分子最少ノ子數ヲ示シ一萬弗以上ノ高給ヲ受クル吏員ニアリテハ又子數多シ之ト共ニ注目スベキハ官吏勞働者使用人ノ所得ガ夫等ノ人住メル地方及土地ノ廣狹ニヨリ甚ダシク左右セラルコトナリ乃チ嫡出蕃殖力ハ二重ニ影響セラレ所得ノ影響ハ其一部ニ過ギズ而モ亦此一部影響ヲ援イテ確實ニ數ニ

表ハシ兼ヌルハ惜シムベシ蓋シカカル研究目的上同一ノ土地ニツキ同業又同社會階級ニ屬シ又同一婚姻持續期間ヲ有スル者ヲ分チ觀察スルノ要アルモカクスルトキハ各類ニ歸スヘキ絕對數少キニ過ギ一般の斷定ヲ下サシメ兼ヌヘキヲ以テナリ。

佛國親族統計ハ又子ノ死亡又ハ生存力ニツキ有益ナル知識ヲ授ケタリトハ前ニ述ベシコトナルガ茲ニハ官公吏員及勞働者ノ親族團ニツキ遂ゲラレタル特別委員調査ガ此點ニツキテモ亦有益ナル研究材料ヲ授ケタルコトヲ附言スルニ止ム。